結草
kusamusubi
No.41

Publishing house:2-19-32Moriyama Kanazawa
JodoShinsyuJhokoji Phone&Fax 076-252-4922
www.jhokoji.net info@jhokoji.net 2024.07.01

共なるいのちを生きている

鈴木大拙館館長　木村　宣彰

今ほどご紹介頂いた木村でございます。どうぞよろしくお願いいたします。ご縁を頂いてもう二十年と聞いてびっくり仰天しております。二十年というと長く感じますけど、過ぎた二十年はあっという間ですね。

皆さんもご存知頂いているかと思いますが、私は鈴木大拙館でお世話になっております。大拙先生は鎌倉の松ヶ丘という所にご自宅があった。そこまで１３０段の石段がある。だから訪ねて来た人は「大変ですね、もっと平地に降りてきたらどうですか」とみんな言います。それはね、訪ねて来た人が大変だから言っているだけで、先生自身は何も大変とは言ってない。「皆さん、下から見ると１３０段は大変だと思うけれど、一段一段ですよ。一段一段歩いていると自然に家まで着くんですよ」、こうおっしゃる。確かにそうだと思います。私も二十年間、このご縁を頂く。最初からこれから二十年間お話して下さいと言われたら、「ちょっと大変だなぁ」と思うかもしれません。しかし、毎年こうして皆さんの前でお話しているとあっという間に二十年経ってしまって、本当にありがたい尊いご縁だと思います。

先程のお勤めで聖徳太子のご和讃に「奉讃不退ならしめよ」とあった。ご縁を頂いてから二十年間、ずっと太子の恩徳を称える法要をお彼岸に勤めさせて頂いているわけです。これは尊いことだと思っています。このお彼岸にあわせて頂くというのは何気ない事の様だと思っていらっしゃるかもしれませんが、これは本当に大変尊いことなのです。

彼岸と此岸

鈴木大拙先生は、「あなた方何気なく思っているけれどね、悟りという言葉を知っている。自分が悟っていなくても悟りという言葉を知っている。これはとても尊いことだ」とおっしゃっています。私は最初にこれをお聞きした時、自分が悟っていないのに、悟りという言葉だけ知っている、「これは寂しいな」と思った。しかしそうじゃない。やっぱり悟りというものがあると知っているだけでも生き方が違う。自分に悟りたいな、悟りの境地に到達してみたいなという気持ちがおこる。もし、悟りという言葉を知らなければそんなことすら考えない。だとすれば聖徳太子様が日本に仏法を取り入れて、悟りという境地があるのだということを教えて頂いたということは、自分が悟っていなくても実はそれはとても尊いことなんだ。

それと同じようにこのお彼岸というのもそうでしょう。彼岸という言葉を知らなかったらこの娑婆が全てだと思ってしまう。彼岸というのは彼方、向こう岸。それに対して今、私達がいる世界は此岸、こちら

岸。こちら岸から向こう岸へ渡るのだ。こっちの岸はどういう世界かといえば、毎日毎日、損だ、得だと言って諍いしている様な娑婆だ。それを渡った向こう岸には諍いの無い様な世界がありますよと。こういうことを教えているのがお彼岸ですね。

彼岸、彼方の岸。大乗仏教では波羅蜜。インドの言葉ではパーラミタと言います。完全な世界に至るということが波羅蜜。そのための修行も大乗の経典の中にはずっと説かれている。布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧。（六波羅蜜）

人々に親切にして物を与えましょう、これは「布施」ですね。自分の執着で、これは俺のものだということだけではなくて施しをする。ものを施すだけではなく、親切にするのも布施です。人に大事な仏法をお伝えするのも布施です。そういう人々に対する布施の気持ちがとても大事と説かれている。みんな私が私が、これは俺のものだと言い出したら毎日諍いになりますよ。一緒に生きるんだ、共に生きるのだという心が無かったら布施の心はおこりません。物を施すのも布施だし、人に安心を与えるのも布施です。そういう気持ちがとても大事ですよと説いています。

「持戒」、世の中の決まりを守りましょうよ。「忍辱」、我慢することも大事です。娑婆というのは堪忍土。娑婆というのは堪忍、我慢をする世界のことをいいます。だから耐えていかなければならない。精進、努力しなければならない。努力というのはとても大事なことですね。

そしてそのことに対して心を集中するというのが「禅定」。そうすると世の中が見えてくる。娑婆というものはこういうものだな、あの人と私とは他人のようだけど本当はみんな繋がっているのだなということが見えてくる。そういうことを大乗の「智慧」というのですよ。

六つの尊い行が六波羅蜜。だからお彼岸の中日を挟んで前三日、後三日の七日間をお彼岸と我々の先輩達はずっと言ってきたのですね。今言っているような世界が実はあるということを知るのと知らないのとでは人生は全く違ってくると思います。お浄土がありますよ、理想の世界はありますよと思って生きているのと、強い者が勝ちだ、損か得かだと思うのとでは全く違ってくる。世の中はもっと乱れますよ。そうではないということを仏法が教えている。

そのことをお太子さんが『十七条憲法』に書いてくださった。「篤く三宝を敬え」、仏法に帰依することがとても大事。その気持ちが無かったら人間のこの根性はどうやって直すのか。身体が不自由だったら薬を塗ったり、色んなお医者さんにお世話になって治すことができるけど、根性の方は見えないもんだから一体どうしたものか。それは仏法にあうしかないと聖徳太子様はおっしゃっている。まだ日本が仏法という教えを頂いていない、信じていない時代に、これこそが大事だと十七条憲法を作って頂いた。

大拙先生は、自分が悟っていなくても悟りという世界があるのだと知るだけで尊いとおっしゃる。合理的な考えをすると、知っているだけでどうするのだと考えがちだけれど、そうじゃない。それを知っているだけでも尊い生き方ができるのだと大拙先生はおっしゃっている。私は本当にその通りだと思います。

こうしてお彼岸にお参り頂く。太子様からずっと続いてきた仏法の伝統がこの浄光寺様というお寺を通じてご縁として続いている。先程のご和讃、「奉讃不退ならしめよ」と、不退というのは、戻ってしまう、なくなってしまうことです。縁が切れると私達はお彼岸のお参りをやめて、お彼岸ということ自体考えなくなってしまう。しかし、こうしてお参りさせて頂いてで

すね、自分はそんな理想の世界にはまだ行ってないけれど、そういう世界があるんだよと思うことがとても大事です。

誰でもよかった

一か月前ですか、関東で十七歳の少年が刃物で人を殺めた。そして「誰でもよかった」と言っている。誰でもよかったとは一体どういうことか。今まで事件があれば、あの人にひどい目にあったとか、怨みや辛みがあってそういうことが起こるのに、誰でもいいから人を殺したかったと。あの事件の後、新聞やテレビのニュースを聞いていると、一体どうしてなのか動機を調べていかなければならないと言っているけれど、その後の報道が全くないですよね。

とにかく誰でもよかったから殺してみたかった。私はその彼と喋ったことがないから分からない。分からないけれど、命という尊さを考える機会がなかったのだろうと思う。十七歳までの間、おそらくご両親もおじいちゃん、おばあちゃんもご健在で身近な人の死にあうことがなかったのではないかと、勝手に推測しています。ご家族やごく親しい人達の死を通して、人が生きているということがいかに尊いか、人として生まれることが尊いか、今過ごさせて頂いているという有難さを考えなければならない。

「誰でもよかった」という言葉は２０００年位。要するに２０年ほど前から使われ始めて、よく分からない事件が起こってきていますね。これは何故かということを考える。それは本当に生きているということがどういうことか、あるいは縁尽きて命終を迎えるということはどういうことか、あるいは命ということはどういうことか、そういうことを考える機会がなかったからなのではないか。

今生が尽きると葬儀を執り行うわけですよね。最初に枕勤め、亡くなった人がお浄土にお帰りになったことを伝える。そして通夜、葬儀。ところがここ数年、新型コロナウイルスの影響でそういうことが出来ない。それで直葬（じきそう）、亡くなった人を直ぐに荼毘（だび）に付す。葬儀とかそういうものを行わない。この言葉が使われ始めたのがちょうど２０００年頃。

実はそれ以前もありました。誰が使っていたかというとお巡りさん。警察用語だと書いてある。身寄りの無い人が亡くなるとご遺体を火葬する。役所が行っていたんでしょうね。それを一般の人が使い出すようになった。昨年の関東圏の葬儀の３５％位、要は三人に一人位が直葬だと書いてありました。亡くなったからといって親戚や縁者がみんな集まる、あるいは近所の人達が集まって枕勤めや葬儀、初七日のお勤めをするということがないのが約三割ある。人が亡くなるということが一体どういうことかを考える機会がない。今、国政調査によると一人世帯が３８％くらい。そうするともっともっと多くなるのではないかと案じています。そういうことが２０００年位から多くなってきた。そのことと今言ったような「誰でもよかった」ということが何か関わっているのではないかと思うわけです。

以前お話したかと思いますが、斎藤茂吉（さいとうもきち）の『死にたまふ母』、その中にお母さんがいよいよ命終を迎える時の短歌がある。「いのちある人あつまりて我が母のいのち死行（しゅ）くを見たり死ゆくを」、みんな集まって母が死ぬのを見るのではなく、母の命が死行くを見たり。

それから野辺の送りをするわけですよ。地域の人達が集まって、荼毘に伏す。火葬する時、私は長男だから火を点けなければならない。明け方、太陽が昇ってきて、近くにあったフキの葉を取ってきて、そこへ母の遺骨

をみんなで拾った。

あれを読むと、斎藤茂吉の母親と死にゆく母、そして荼毘に伏す、その時の様子が全部書いてある。周りで鳥が鳴いている、あの鳥もみんな母を弔っていると感じる。赤い燕の喉が見えた。私の母を弔ってくれているのだ。みんな一切すべてのものが関わり合っているような気がして、そのことを一つ一つ歌にして全部残している。

十七歳の少年には、今言ったような地域の人と関わる機会も無かったのではないか。おそらくそれまでそういう機会も無く、そして自分が生きているということも、あるいは命が尽きるということも深く考える機会が無かったのではないかと私は勝手に思っているのです。「誰でもよかった」という言葉が問題になったのは二十年前の２０００年頃。葬儀をだんだんとやらないということも２０００年頃だと調査されている。そうすると何か関係があるのではないかと思っています。

アメリカではキリスト教だから火葬よりも土葬しているわけです。数年前、河が氾濫して土葬したものが流れ出てきた。なぜか身体の一部が全然腐敗していない。どうしてなのか調べたら、防腐剤を入れた食品を食べ過ぎたから。だから土に還らない。今アメリカの六つの州では、堆肥葬が法的に認められた。堆肥というのは野菜や花を育てる時に必要な堆肥、人間は堆肥ではないですよ。

堆肥葬、どういうものかといえば、棺のようなものがあって、その中に藁とか堆肥にするようなものが入っている。そして、そこへ亡くなった方の遺体を入れて密封する。そうすると藁やそこに入っていた微生物が人間の身体を全部腐敗させるわけです。それから数週間するとほとんど堆肥になっていると書いてありました。密封した所に入れて、ほぼ一ヶ月位で微生物がみんな分解して、更に数週間経つときれいに堆肥になる。そういうような葬儀もやってもいいですよとアメリカの六つの州では法律で決めたという。

確かに火葬のように二酸化炭素を出さないかもしれないし、あるいは土葬のように場所の問題もない。遺体を箱に詰めて堆肥にして庭の花にあげましょう、そういうやり方もあるかもしれないけれど、それでは命の尊さというものが分からない。

何十年か前に検事総長が「人は死ねばゴミになる」と書いた本があったけれど、そんなことではやはりちょっと悲しい。やっぱり人間に生れることは尊いものだ、そして今生かされているということの軸を持っていなければと思います。

分からなくなった命

あるお寺の幼稚園の記事にこう書いてある。園児たちの為に小鳥を飼っていた。鳥かごに入れて飼っていたのでしょうね。子供たちが餌をやっていたかもしれません。ところがその小鳥が亡くなった。命あるものはいつか死にます。限りある命を生きているのですから。そうしたら先生が放課後、園児が帰った後、境内の隅にその小鳥の死骸を埋めた。

そして翌日、園児達が「先生、小鳥ちゃんはどうしたの？どこへ行ったの？」と聞く。それは当然聞きますよね。今までいた鳥がいなくなったら。そしたら先生が何と言ったか。「天国に行ったの。だからあそこの隅に埋めたの」と先生が言った。その時の園児は、あぁそうかと分かったような、分からないような返事をしてその場は終わった。想像できますよね。子供にしたらあぁそう、としか言えない。

ところが翌日の朝、園児の一人がそのお父さんと小鳥を埋め

た場所を掘り起こしていた。どうしたんですか、と先生はびっくりした。まさかそんなことをする園児がいるとは思わないから。何故そんなことをしたのか先生がお父さんに聞いた。そうしたら、子供が可愛がっていた小鳥が死んで、先生がここに埋めたというので、どうしてもそれを確かめたいと、言うこと聞かない。そこに埋めたなら、その小鳥を見たいと娘が言うものだから朝早く来て、先生が園に出勤する前に掘ってみた。この幼稚園児は四歳か五歳か分かりませんけれど、おそらく小鳥が死ぬということがどういうことか納得出来なかったのだろうと思います。ましてや先生は小鳥ちゃんは天国に行ったと言った。お寺の幼稚園ですが、分かりやすいように天国と言ったのでしょう。埋められた小鳥はどうなるのか。それはおそらくこの子は一晩中考えたと思うんですよ。この子にとって、おそらく初めての生き物との別れだった。

先程言ったように自分の身近なお父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんとの別れがあって、そのことを通して自分で納得して答えを出していれば掘ってくれとは言わなかったかもしれません。また十七歳の少年も誰でもいいから殺してみたかったと言わなかったかもしれません。おそらく十七歳の子供にしても生き物が死ぬということがどういうことか、納得できなかったんでしょうね。命というものがどういうものか分からなかった。猫を殺しても命というものは形が無くて見えないから、だんだんエスカレートして、誰でもいいから人間を殺してみたいと思うようになった。発表がないから私の勝手な推測です。またこの園児も言うことを聞かない。このお父さんも普通だったら相手にしないかもしれないけれど、真正面から娘の疑問、不審、疑惑を解決しようとなさったんですね。しかし掘ってみても解決しない問題かもしれません。

米原万里（よねはらまり）というロシア語の同時通訳の人がいて随筆集を書いた。題が『真夜中の太陽』。夜になったら月は出ているけど太陽はいないわけですよ。「真夜中の太陽」と妙な題だなと思って手に取りました。

米原万里さんは、四、五歳の頃、昼は太陽がいるのに夜になったらいなくなってしまう、一体どこへ行ったのか、不思議でしょうがない。明るかったのが真っ暗になって、怖くて怖くてどうしようもない。夜に　お手洗いにもいけなくておもらししたらお母さんに叱られた。そのことをお父さんに話したら、「まり、太陽は何処にもいかないのだよ」と。地球の裏側でここで輝いていた様に、同じ様に輝いていると絵に描いてくれたり、球を持ってきたり棒を持ってきたりして、汗をかきながら説明してくれた。

それから米原さんは、夜が怖くなくなった。夜になったら太陽はこの世界からいなくなるけど無くなるわけではないのだ。地球の裏側でみんなに光を与えているのだと分かったら、それ以来何にも怖くなくなってお手洗いにも行けるようになったと書いてある。

おそらくこの幼稚園児もそれに近い様な気持ちを持っているのかもしれませんね。しかし、そんなこと説明しなくても今まで日本の社会だったら、亡くなれば、枕勤め、葬儀、初七日などを通して徐々に自分で納得をいくような答えを得ていたのかもしれない。しかしそういうものが無くなれば無くなるほど命というものが分からなくなる。なかには猫を殺して命とはどういうものか確かめたいという人が出てくるかもしれない。この幼稚園児の話を読んで、もっともっとそういうことを経験し、尚且つきちんと丁寧に伝えておくことが大事なんだと思いまし

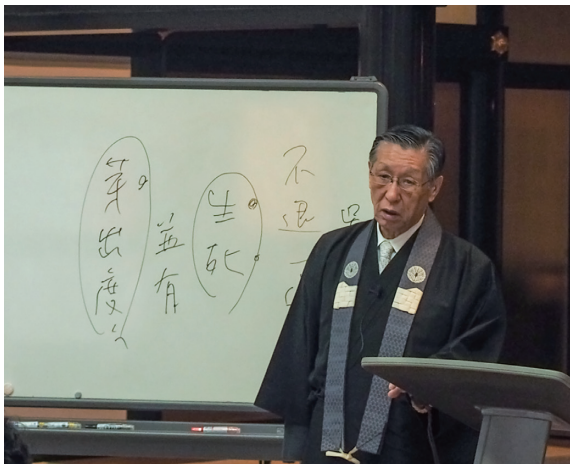
た。

よくよく考えると、先生が小鳥の死についてなんの説明もなく勝手に埋めた、その事が良くなかったと書いてある。小鳥の死について相談しなかった。可愛がって世話をしていた小鳥が亡くなった、みんなどうしましょうと相談して考える機会があればこんなことにならなかった。天国に行った、あそこの隅に埋めた、これだけでは納得できない子供がいるかもしれません。

我々の先輩たちはずっと自分の身内に関わる親族の死、あるいは地域の方々が亡くなった時に、みんなその亡くなった方を送ってきた。どこに送る？彼岸の世界に。この娑婆を超えた世界、あるいはお浄土と言っていい。先輩のおじいちゃん、おばあちゃんが、「坊、人間が死ぬということは、こういうことだぞと。お浄土にいくことはなんも怖いことではないぞ」とか、色々なことをおっしゃっていたのを思い出すわけです。

そういう事をずっと繰り返してきたんだけれど、今はそういうことが無くなった。葬儀といっても、亡くなった人をお送りするというよりも、その遺族に「愛想もないことになったね」と遺族を弔問している。命というものを考える機会がなくなったのではないかと思います。あの一ヶ月前の埼玉県の事件は、もっともっとみんなで共有して考えなければならない問題だと思います。

アメリカの六つの州、亡くなった人を埋めなくてもいい、火葬しなくてもいい、堆肥にして土に還ったらお庭の花にあげましょう。こんなことが日本で認められたら、これは太子様に申し訳ないのではないかと思いますね。あの憲法の第二条、「篤く三宝を敬え」、三宝を敬えということはどういうことか。私たちの根性を直すことができないと書いてある。私を含め現代人は、人から痩せたね、と言われると嫌だから、もう少し沢山食べようとか一生懸命考えるし、いいサプリメントを摂ろうとか身体の栄養のことは考えるわけですよ。しかし、肉体、身体の栄養が必要なのと同時に心、気持ちの手当てもして、育てて栄養を与えていくことがとても大事だと思います。



私が随分若いころですが、近所の篤信家のおじいさんがいて、「信心も太るんですよ」と私に言うのです。信じる心が太るとか太らないとかそんなものではないと思ったけれど、そのおじいさんは、信心は太ると言う。今そういうことが簡略化されている。もちろん肉体と身体、これも大事ですよ。酒飲み過ぎたらダメだし、健康には留意しなければならないですが、それと同じようにやはり心も世話をする。心に栄養を与える。そういうことがとても大事なことだと思います。

お正月になったら「おめでとう」と言うでしょう。おめでとうというのは、ハッピーニューイヤー。おめでとうというのは、もともとは「芽が出る」という字を書くのでしょう。今は目玉の「目」を書いてあるけれど、「芽」ですよ。冬の間に芽が出てきて成長して、それが秋に紅葉するわけです。私なんかは秋に紅葉した葉を見て綺麗だなとしか思わないけれど、寒い冬、じっと見てみると芽が出ている。隣の梅を見ると同じように

出ている。雪割草も咲いている。「芽が出る」、「芽出度い」。自然と共に生きて、そこに何かね、もったいない、有難いなという気持ちが起こることが心の栄養です。心を育むということ。心の世話をするということ。我々の先輩達は新しく生命、芽が出てくる、このことが有難いことなんだと。そしてそれは植物だけではなくて私達もみんな同じ命を共有しているのだ。バラバラではないし、命はみんなずっと続いている。

共なるいのち

先日新聞にも書きましたが東日本大震災の3・11の日、私も大拙館にいましたから来館頂いた方々や職員と共に黙とうをしました。館内へ放送してお越しの方、黙とうしますと。皆さんどういうことを思って頂いているかはわかりませんが、みんなで黙とうしました。地震で亡くなった方、行方不明になった方が二万人ほどいる。我々は新聞などで多い少ないと数だけにとらわれますが、そのお一人お一人の命が、私のかけがえのないこの命と同じ命なのだということを考える。そうするとやはり大震災でたくさんの亡くなった方とみんな繋がっている。

繋がっていると思うとどうなるかというと、その亡くなった方々から私の方が逆に見つめられる。どういう日暮らしをしているか。私の母も昨年の暮れに亡くなった。もう言葉はないですが何か私に伝えてくるわけです。形がない、なければないほど何か私の心にメッセージが伝わってくるわけです。そういうものを感じることが我々の心の栄養なのです。心の世話なのです。

新聞などでは身体の健康のことばかりで、ああしましょう、こうしましょうと書いてある。私もお酒が好きだから飲み過ぎてはいけないと思ったりします。けれど、あなたのその邪（よこしま）な心を何とかしなさいとは誰も言ってくれません。

でも自然の芽吹きは、あぁ損も得も何もないな、すっと生きている。それが親鸞聖人がいつもおっしゃっている自然法爾（じねんほうに）ということ。自ずからそうなっている。自ずからそうなっているということは、何かのはたらきかけがある。親鸞聖人のお言葉、「念仏申さんとおもいたつこころのおこるとき」。私は凡夫ですから、妬（ねた）み嫉（そね）み怒り腹立ちの心があって、とても悟りを開ける心があるとは思えないし、涅槃にいけるとは思わないけれど、「南無阿弥陀仏」と出て来た時に如来の方からの大きなはたらきかけがある。それが要するに欲生心。この娑婆、諍いがない世界がいいなと、その世界を求める心じゃないですか。それが私達の心や精神を育む大きなはたらきだと思います。

今日は私の母や父の万年講のお勤めを頂いた。三日、三十日と。先程『阿弥陀経』の読経がありましたね。やはり母のことを思ったり、三十数年前に亡くなった父のことを思いながらいました。阿弥陀経に「白鵠（びゃっこう）・孔雀（くじゃく）・鸚鵡（おうむ）・舎利（しゃり）・迦陵頻伽（かりょうびんが）・共命之鳥（ぐみょうしちょう）」とありますが、極楽にいる鳥達です。孔雀や迦陵頻伽や色んな鳥達がいる。その中の共命鳥。共命の鳥。あるいは命命鳥という。

共命鳥というのは頭が二つある。身体は一つ。お浄土ではこの鳥達が妙なる素晴らしい声で囀（さえず）っている。そして仏法を教えている。阿弥陀経では八正道とか色んな人間の修行のことが説かれているけど、他のお経を読むとこの娑婆に来た時の共命鳥のことが書いてある。『雑宝蔵経（ぞうほうぞうきょう）』、あるいは玄奘三蔵（げんじょうさんぞう）法師が書かれた『大唐西域記（だいとうさいいき）』という旅行記がありますが、そこにもヒマラヤに共命鳥がいると書いてある。

どういう鳥か。頭が二つ、で

※「きこまいけ」毎月28日・午後２時～　みんなで「『正信偈』」のおけいこをしています。お気軽にどうぞ。

も身体は一つ。身体が一つということは命を共有している。命は一つ。この二つの頭の鳥がそれぞれ別のことを考える。片方が寝ると片方は起きている。片方が美味しいものを食べたら、あいつ、美味しいもの食べてと腹を立てる。もし頭が二つあったら自分の中に葛藤があるより大変ですよ。片方の頭が起きていても俺は寝るわ。あいつが美味しいものを食べたのなら、わしは毒のものを食べてやろうと。どうなるか？身体は一つ。共なる命を生きているのですから片方が毒を食べたら両方共死ぬんです。そんな馬鹿なことをとお思いかもしれませんが。

お浄土にいる共命鳥は妙なる声で仏法を説いてくれるけれど、娑婆に来た共命鳥は片方が美味しいものを食べたら、俺は毒を飲んでやろう、と仕返しをしていく。新聞やテレビなどのニュースの事件はみんなそんなものではないですか。私達の命はみんな同じ命で繋がっている。『正信偈』の「帰命無量寿如来（きみょうむりょうじゅにょらい）」、共なる無限の命から私達は頂いている命をみんな共有して生きている。しかし頭の方では諍いしている。毎日毎日そういうニュース。それはまさに共命鳥がそういうことを教えていると思います。

娑婆では片方に良いことがあれば妬ましく思って反対のことをする。それはその人だけの問題ではない。同じ命ですよ、無限の命ですよ。その無限の命をあの正信偈のところで「帰命無量寿」といっている。みんな共なる命を生きているのだと。互いにあなたの命も私の命もみんな同じ。命はみんな繋がっている。その命の大元が無量寿の如来から命をもらっているともし思えたら、生き方が変わってくる。それを親鸞聖人は、凡夫だからなかなか毎日そういうことを考えないけれど、「念仏申さんとおもうこころ」がおこった時に如来側からそのはたらきがありますと。それがあった時に聖徳太子様は憲法が人間の曲がった心を直してくれるんだ。だからこそこの日本に仏法を広めなければならないとおっしゃってくださった。その恩徳に報いる場がお彼岸の中日の今日、浄光寺さんに伝わっている。

共命鳥はみんな全ての人は同じ命を生きているのだから自分勝手なことをしないでみんな共に生きましょうよということを教えてくれている。今日はみなさん、そのことを感じ取って頂けたらと思います。さっきの幼稚園の子供、小鳥が亡くなって、天国に行ったというけれど、その身体はそこに埋められているということがどういうことか、素直に命ということを考えた。それに対してきちんと一緒にそうだねと言いながら考えていくことがやはり大事なことだと思います。

お彼岸の法要というものが大きな意義があるということだと考えて皆さんにお伝えさせて頂きました。本年もお参り頂きましてありがとうございました。

《編集後記》

◇本文は令和五年三月二十一日、浄光寺「お太子さん」の法話録であります。洵（まこと）に勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集させていただきました。

＊行事のご案内＊

「追弔会」
八月十三日・午前十時～
法話　細川公英師（順教寺住職）

「きこまいけ」（聞法会）
毎月・二十八日　午後二時
お気軽にご参加ください

＊お知らせ＊

ホームページを
リニューアルしました！